
俺と貞子（オレサダ）

走る地軸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレサダ
俺と貞子

【Nコード】

N7282D

【作者名】

走る地軸

【あらすじ】

ひよんな事からのろいのビデオを手に入れた主人公と、ビデオから出てきた貞子の謎な物語。

呪イノビデヲ（前書き）

この物語はリングのパロディ？です。

疑問文になるくらい、原作のイメージを壊しているので、原作のイメージを重要視する方は、読まないで下さい。

作者は原作を読んだことありませんので、設定等、原作とは違う所が数多くありますが、いつその事良く似た別物と言うイメージで見てもめらえりと助かります。

呪いのビデオ

彼女が来て一週間がたった。

いい加減働けと思う。

事のはじまりは、こうだ。

友人が呪いのビデオとやらを俺にくれた。

友人曰く。

「今時、VHSはねえよ、お前持ってたよな？やるよ。本当に貞子出てきたら。教えるよな。」

まあ、俺は呪いなんぞ信じてないが、興味はあったので見ることにした。

それが、全ての間違いだった。

デジタル放送のハイビジョンプラズマTV薄型に井戸が写る。

有名なあのシーンだ。

井戸から長い髪の女が出てくる。

なんかやばい気がする。

女がはいつくばって、こっちへ向かってくる。

なんか、部屋が涼しくなってきた。

そう、彼女はテレビから出てきた。

やべえ、金縛りって奴か……。動けない！！

クル！！きつとクル！！きもももももももももも

ビデオがキュルキュル言ってる。

あーこれは、絡まったな。家のビデオデッキ古いし、当分クリーニングしてなかったからなあ。

あ、TVから出てる彼女、上半身だけ出てきて引っかけたジタバタしてる。

金縛りとけてるけど、面白いからもう少し見てよ。

30分後。

なんか、睨んでくる。怖いからもう少し放っておこう。

1時間後。

なんか涙目でこっちをみてる。あ、意外と可愛いかもしれん。

「助けてえ」

仕方ないので、ひっぱってやる。

俺が手を貸すと意外と簡単に抜けた。

「・・・・・・・・・・。」

沈黙がきまずいので声を掛けてみる。

「確認だが、お前、貞子だよな？」

こくり。

頷いた。貞子らしい。

「じゃあ、俺一週間後に死ぬのか？」

こくり。

どうやら、死ぬらしい。

って、死んでたまるか！！

ガリガリガリキュルキュルプシュー

あ、デッキが煙ふいた。

「嫌アアアアアア！！」

突然叫びやがった、こええ！

なんか、TV画面にすがり付いてる。

「もしかして、帰れなくなっただとか？」

こくり。

涙目で頷いてくる。

「ざまあ見る。人を呪うからこうなるんだ。」

「うわああああああん」

パシィィン

泣きながらビンタされた。

お化け（？）にビンタされたよ、おい。

暫く貞子は、泣いてるので仕方ないので放っておく。

取りあえず、飯にした。

気がついたら、泣いてた貞子がこっちを見ているので、喰うか？と聞いたら、食べるらしい。

彼女が来て一週間がたった。

「なあ、俺死なないんだけど？」

「！？」

何驚いてんだ？

呪ったの忘れやがってたな。

どうやら、俺は死なないらしい。

—安心だ。

つつか、コイツ普通にいついてやる。

住み着くはいいが、いや、あんまり良くないが、食費がかさむ。

いい加減働けと思う。

呪イノビデヲ（後書き）

えー俺と貞子、略してオレサダいかがでしたでしょうか？
エー感想とか、ドシドシください。

貞子かわいいー。とかの一言でもいいです。
ください。

恐怖ノ味噌汁

俺は、リビングでアニメを見ながら、ポテチを食べてる貞子を見て前から思っていた事を告げる事にした。

「なあ、この際、呪われたから、お前がいついてるのは、取り憑かれたとして我慢しよう。」

あ、ポテチが口のまわりについてるから、ティッシュで拭いてやる。

こくり。

「でもせめて、飯食うなら働け。」

え？幽霊（？）だから、戸籍無いから履歴書作れないし、働けない？

ちつ、確かにその通りだ。

「じゃ、家事くらい手伝えよ。」

こくり。

意外と素直に頷いた。家事に自信があるのだろうか？

え？夕飯作るから、作ってる間決して覗くなって？なんでだよ？

「恥ずかしい」

頬を紅く染めやがった。少しうざいが、ちょっと可愛かったのと言

うとおりにする事にした。

5分後。

「ねしねしねしねしねしねし……。」

キッチンから、ねしねし聞こえる。

ネシってなんだ？不気味だ。

そう言えば、友人が貞子出てきたら教えろって言ってたな。

Trrrrrrr。

「もしもし、俺だけ。」

「俺俺詐欺なら、間に合ってる。」

友が行き成りボケてきた。携帯にかけてんだから分かるだろう。

「イヤ、お前に借りた呪いのビデオあるじゃんか？マジで貞子出てきたぞ。」

「は？マジか？で、どうなった？」

「今キッチンで、夕飯作ってる。」

「……………」

「……………」

「妄想ならチラシの裏にでも書いててくれ。」

ガチャ

切りやがった。

まあいい、約束は果たしたし。信じられて、友人に見にこられても、今は面倒だ。

「で・き・た・よ。」

「うわ、行き成り耳元で話しかけるな怪奇現象め。」

バチイイイン

ビンタされた。

事実じゃねえかよ。

というわけで、食卓に着くと。

多分、ご飯と味噌汁だ。

多分って言うのは、それっばいだけで、まったく違う物だからだ。

いや、コレは彼女が生きていた頃の郷土料理かもしれない。

ご飯、否、薄く緑色に染まった米を口に運んでみる。

この味わい、この匂い、まさしく。

「ぶっ、」 Yじゃねえか!!!」

バシィィン!!

」 Y米吹いたらビンタされた。

食べ物が無駄にするな？それはてめえだ。

ちなみに、」 Yとは、緑色で油汚れに超強い強力洗剤である。

味噌汁は大丈夫だろうと、思って。いや、大丈夫だとは思ってないが飲まざるは得ないので、飲んでみた。

色は、黒である。

飲んだ瞬間、俺は意識を失いかけた。

「いったい何入れたんだ、お前味見たのか？」

え？してない？というか、そんなもん飲んだら死ぬ？

わざとかよ……。

「うっ、吐きそう。」

バシィィン

酷い!!!とか言ってビンタされた。

俺はその一撃に完全に意識を落とした。

明日、こいつに料理を教えるかと思ったが、とりあえず、神社に行ってお払いしてもらおうかなと思った。

恐怖ノ味噌汁（後書き）

まあ、こんな無意味な（？）日常ってのもいいですよね。
感想お待ちしております。

丑の刻参り

今日は神社に来ている．．．もちろん貞子もだ。

「デート．．．。」

「違うだんじて違う。」

とりあえず、事務所に向かおう。

お、巫女さんがいる。

「あの、すみません？」

巫女さんに話しかける。

「なんでしょうか？」

「呪われてるんです。」

「は、はあ．．．えーっと御被いですか？」ご予約の方はされてますか？」

ちよつと引かれてしまった．．．。

「予約なんてあるんですか？」

「はい、予約されますか？」

「はい、しまっ・・・ちよっ、なにすんだよ」

貞子が俺をひっぱて来る。

そりゃ、自分が御被いされるとなれば、慌てもするか。

「ねえ？呪われてるの？誰に？」

おめえだよ！！

「えーっと、恋人ですか？」

「え、ちがいm」

「はい、そうです。」

ちよつと、待て！！頬染めて何言っただ！！ちよつと可愛いじゃねえか・・・じゃねえ！

「恋愛成就のお札もありますのでそちらもどうぞ。」

なんという商魂溢れる、巫女さんだ。

というか、貞子を見て人間の恋人とか、大丈夫かこの神社・・・。

まあ、巫女なんてアルバイトとかだろうし、神主さんが凄い人である事を祈ろう。

「えーと、御被いでしたよね、ご予約されますか？」

「いえ、また電話で予約させてもらいます。」

貞子の前で予約なんてしても、邪魔されるだけだろうしな。

「帰るぞ。」

貞子に声をかける……………。

「いねえ……………」

さっきまで、俺の服のすそ引張ってたくせに、いやしねえ……………。

このまま帰ってもいいが、なんだかたたられそうだ。

探してみるか……………。

数分後……………。

「んーんー」

俺は貞子を見つけた。

「んーんーんー」

一生懸命大きな石を動かそうとしている貞子、その石の下には……………。

井戸。

「やめれ」

パスンと後頭部をはたいてやる。

「んゝんゝ！！」

「その井戸はもう使われてない井戸だからそうやってんだ、どかすんじゃない。」

「でも・・・」

「でもじゃねえ、なんだ？井戸の中帰りてえのか？なら止めないが二度と俺の家にくるなよ？」

これで、追い出せるなら俺的に問題無い、放っておけばいいんだから。

「うー。」

「うーじゃねえよ、微妙にこええよ。」

「じゃあ、お金頂戴、500円。あ、やっぱ千円。」

「なんでだよ！！大体ここに来るにもお前の身なりやべえから、それなりに整えてやったんだぞ。」

ちなみに、彼女は、今日は綺麗な白のワンピースで伸び放題の髪をある程度美容院で整えてやった。まあ、その時の話はまた後日だ。

「無駄に金ばっか浪費してるくせに、小遣いまでよこせって言つての

か？」

「働くから……。家事とか……。次は頑張るから……。」

「頑張って俺を殺すつもりか？」

「ううっ……。」

あーちくしょー、俺も甘いよなあ……。

「ったく、しょうがねえな、ホラ1000円。なんに使ったかしらんが、帰ったら風呂掃除はお前がしろよ。」

「う……。うん」

あー、うれしそうな顔しやがって。

「で、何買った……。。」

てこてこ、販売所に走っていく貞子。

あ、こけた……。新品の服砂まみれにしゃがって、だから俺は黒い服にしろと……。

まあ、黒い服だと、雰囲気事態が暗いから、もっと暗くみえるんだよな……。っと帰ってきたな。

「で、何買ったんだ？」

「ん……。。」

これって、恋愛成就のお守り……………。

「おそろい……………」

俺のが緑で、貞子がピンクのを持っている…………。

「あ……………ん……………」

なんだ、待て……………あれか？

こいつ俺に気があるのか？

ちよっ…………ちよつと待て、こいつ俺を殺しに来た化け物じゃねえのか？

は？

「んーんー」

「おい、これ……………って待てい!!」

貞子に目をやると再び井戸の上の石をどかそうとしていた。

「やめい、あーもう、お前だけはわからねえ、帰るぞ、いつまでもそっやってんだっいたら置いて帰るからな。」

「ま、待ってー。」

丑の刻参り（後書き）

お待たせしました。

え？待ってない？

まあ、待つてなくても読んでくれた方ありがとうございます。
ちょっと今回はラブ多めでいきました。

次回もお楽しみに。

七夕星願祭

「これでいいか。」

俺は、ササを自宅マンションの窓からたらしていた。

こう見えても、四季の行事は大切にするほうだ。

こう、窓からたれるササってのは、風流だな。

「何？これ、食べるの？」

貞子が来てアイスを齧りながらそう言った。ていうかそのガガリ君最後の一個俺の分じゃねえかこの野郎。

「お前さあ、飯にも昔の人の慣れの果て（？）だろ。七夕くらい知っとけよ。ていうかそのアイス俺のだよな？」

「ああ……。そんな行事あつたよねえ」

「ったく、飾りつけ手伝えよ。ていうかそのアイス俺のだよな？無視してんじゃねえよ」

「じゃあ、短冊書くな。ボリボリ。」

アイス全部食いやがった。

「だからアイス俺にも一口くらいよこせ！ー！というか短冊は最後だ、先にリングとかつけるよ！ー！」

「リングー！」

「そうだよ、リング。そこ折り紙置いてあるから、切って繋げて、作り方わかるよな？」

「まかせて、リングなら私におまかせ。」

なんという、満面の笑み。なんか妙な事に自信あるんみたいだな。

俺は違う飾りでも作るか。

切り・・・切り・・・切り・・・貼り・・・貼り・・・貼り・・・
貼り・・・。。。

切り・・・切り・・・切り・・・貼り・・・貼り・・・貼り・・・
貼り・・・。。。

切り・・・切り・・・切り・・・貼り・・・貼り・・・貼り・・・
貼り・・・。。。

「ぼそぼそ」

切り・・・切り・・・切り・・・貼り・・・貼り・・・貼り・・・
貼り・・・。。。

切り・・・切り・・・切り・・・貼り・・・貼り・・・貼り・・・
貼り・・・。。。

切り・・・切り・・・切り・・・貼り・・・貼り・・・貼り・・・

貼り・・・・・・・・。

「ぼそぼそ」

むう、貞子が何かボソボソ言ってる。

丁度貞子の横にあるペットボトルのジュースを取る振りして、盗み聞きしてやろう

「リングを作るリングの貞子・・。クククク」

「ぶっ!!」

ジュース吹いた。

「・・・・・・・・。汚い。」

「す、すまん。」

反則だろう、それは。

そんなこんなで、飾りつけは無事終了した。

「終わった。リング沢山つくった。」

訂正、貞子が、リングを10メートル以上作った事をのぞけば、無事だ。

「ああ・・・・・・・・。ササが見えないくらい作ったな。うん。」

まあ・・・折角一生懸命作っただ、何もいわまい。

「後は短冊か。何書くかな、貞子は何書いたんだ。」

「秘密。もう吊るした。」

いつの間に…………。

「なら、俺も秘密な…………。」

貞子が早く成仏しますように

「ちよっ、待て見るなよ。おい。ぐふっ！！勝手に見て怒ってるんじゃないねえ！！」

「塗り潰すな、ちよっ、そのまま吊るすな…………。」

もっと仲良くなれますように。 貞子

貞子が早く（ぐちゃぐちゃぐちゃと塗りつぶされている）

（裏面に）

貞子をもっと笑うようになりますように。

七夕星願祭（後書き）

今回は、割とラブ多目？多目かな？

次回あたりは、シリアス多目でいきたいんだけどそんなの求めてない？

読者さんからシリアスも読んで見たいとか言う声があれば、書きたいと思います。

感想よろしくー。

超常現象巫女都市伝説

「頼むこの通りだ。」

俺は、久しぶりに顔をだした大学で友人に頭を下げられていた。

「お前だけが頼りなんだ・・・。」

そう言われても困るんだが。

そんな事を思いながら、何故こんな事になったのか思い返していた。

「秋だな。」

「いきなりだな、友。まあ、確かに秋・・・いやもう冬が近いが。」

「秋と言えば、恋の季節だな。」

「あー、それは春じゃねえか？」

「いやいや、こう心身共に冷える時期、心と体を温めあう季節。恋の季節だろう？」

「いや、お前それ、夏にも似たような事、言つてたじゃねえか。」

この友人、いい奴なんだが女好きなんだよな。

「それは、それ。これはこれ。つてやつだ。ともかく、今は恋の季節なんだ。」

「わかった、わかった。恋でもなんでも好きにすればいいだろ。」

「でさ、合コンの話だけど今度、知り合いの大学のお嬢さん方とすることに決まつたんだが……。」

「なにが、でさ、なのは、分らないが、それは良かったじゃないか。」

「で、一人男のメンツが足りないんだが……。」

「いや、俺パスで。」

「待て最後まで話を聞け、今度は前みたいな事はない。絶対だ。」

以前こいつの誘いで顔をだした合コンでは……………
……………うん、思い出すのはよそう。

「お前がどう言おうが、俺はパスだ。」

「だから、話は最後まで聞け。なんと今度は神道科の女の子達なんだぜ！」

「だからどうした。」

「お前馬鹿だろう、いや馬鹿だ。神道系即ち、巫女さんだぜ即ち清らかな乙女だぜ!」

言いたい事は分かるが、こいつは夢見すぎじゃないだろうか。

「いや、わるいけど、兎に角パスだ。」

「頼むこの通りだ、お前だけが頼りなんだ。」

と言っわけなんだが。

まあ、正直別に合コンくらい付き合ってもいいんだが……。

「お前だってフリーなんだから、巫女さんの彼女が出来たら嬉しいだろう?」

フリーか……。思い浮かぶのは貞子……。

いや、あれは彼女じゃねえよな。うん、まあ、違う。

「まあ、すぐに返事をくれとは言わん、来週の水曜までに返事をくれれば構わん。それまで少しくらい考えてくれ。」

「考えるくらいならいいが・・・。」

まあ、確かに人肌恋しい季節。貞子みたいな図太い女(?)に擦れた心を、優しい巫女さんに癒してもらいたくないと言えば嘘になる。

「とは、言ったものの、どうしたもんかな。」

友人との話を終え、玄関のドアを開けながら呟いた俺は、玄関の向こうにいた存在に・・・。

「・・・・・・・・・・。」

絶句した。

「はらいたまえーきよめたまえー」

巫女貞子だ。

「どこから突っ込んだらいい？格好か？棒読みか？それともお前はエスパーか！！みたいなのか？」

「駄目？」

なにが駄目なのか、駄目が良いか言ったら・・・・・・・・。。

長い髪。白いうなじ。赤い袴。

.....

ふ・・・不意ながら良いとしか言えないが。

「だったら・・・良いでしょ・・・」

「いや、だからお前はエスパーか、心を読むな。」

「そう、私には超能力がったの。」

「は？」

確かに超常現象の長たるお化けである貞子なら超能力のひとつや二つあってもおかしくない気もするが、いやでも超常現象とお化けて別ジャンルな気がする。

「ん。」

貞子が差し出した紙を見る。

どうやらPCサイトを印刷した物らしい。

サイト名はW E E K E Y 私たちの鍵と言う辞書サイトみたいなもので、貞子の欄が印刷されている。

どうやらそれによると、貞子が呪いで心臓麻痺を起こす方法はサイ

コキネスによるものらしい。

「なるほど、お前はただの呪いのお化けじゃなくて、サイキックお化けだったわけだ。」

サイキックゴーストのほうがゴロがよさそうな気がする。

「違う、サイキック都市伝説って呼んで。」

なんだ、そのこだわりは。

「それで、心を読んだにしても、その服装はどうした……。」

「私はもとも不定形な想像の産物だから、姿形を多少変えるのは、簡単らしい。」

「だったらこの前、買った服意味ねえじゃねえか。しかもらしい。ってどう言う意味だ。」

「前は出来なかった。らしい、って言うのは、隣の高校生から聞いた。」

このマンションの隣？空き部屋だったかと思ったが誰が入ったのか。ていうか勝手にお隣さんと交流してて尚且つ正体ばれてんのかよ……。

「なんで、よりによって巫女なのかとか聞きたいけどもういいや。飯の準備するからテーブルかたづけとけよ。」

「遠視と遠聴……。」

「え？何？」

「なんでもない、夕飯の準備なら出来てる、カレーだけど。」

「は？いやお前の料理のLVは……、あ、でも良い匂い。いやいやでもたまされないぞお前の殺人料理は……」

おまけ

ちっ……意外と……。美味かったよな。

しかも、風呂掃除もしてあったし。

遠視と遠聴って……。遠くの物を見聞きするって事だよな。

ということとは俺の様子を見てたわけか。後で注意しとかなくちやな、覗かれてるってのはいい気分じゃな。

でもまあ、合コンの件を聞いて巫女衣装って事は……。

あー、考えるのめんどくせえ。

送信BOX

宛先 友人

件名 合コンやっぱり無理

本文

んな事されたら、いけるわけねーだろ。

後日友人に当然のごとく意味不明だと言われた。

超常現象巫女都市伝説（後書き）

お久しぶりです地軸です。

今回のメインは友との掛け合いと、伏線です。

最近きづいたんですけど。

主人公の名前が無くて困ってます。

このまま最後までなしでいくのか。

いきなりだしちゃうのもどうなんだろうかと悩んでいます。

ちなみにほかのサブキャラクターには名前があります。

一人にいたっては名前がでてます。

次回あたりにその名前が出てるサブキャラの名前についても触れてみたいですね。

彼乃名巴友人。

「おい、トモヒト、まじで俺の家くんのか？」

「……。」

「やめとけって、ホラ、トモヒト今日バイトある日だったろ？やめとけて……おい聴いてるのかトモヒト……友人！！」

「あつ、ああ、オレか……。カタカナで呼ぶから誰かとおもった。」

「は？かたか……。そういうメタい事言っな。」

「まあ、それはともかく、今日はバイト先が改装で休みだからな、つーかお前の同棲相手見るまで帰れないからな。」

「なななななな、なにを言ってるんだ、同棲なんてしてねーよ。」

「この前、お前の家の隣に高校生引越してきたろ？」

「ん、ああ。」

「あれ、オレのバイト仲間。聞いたぜ、長髪色白美人が居るって。なんでオレに黙ってるかなあ……。」

「いや、一応報告したんだけどな……。」

「は？聞いてねえよ、そんな事聞いたらその日に見に行ってるって。」

いや、貞子が出てきて、飯作ってるって言っただけだなあ……。

「つか、お前にもついに恋人か……。」

「つかどうする？まあ……ばれねえよな。部屋までついちゃったけど……。」

ガチャ。

「ただいま………。帰ってきて……。」

「おじゃま……。」

ドアのぶを開けたそこに居たのは……。

クル……キットクル……

つーかこの曲どこから流してるんだろぅな……。

「キットクルキセツハシロツクー」

デフォルト貞子（恐怖VER）が歌ってた。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアア」

叫ぶトモヒト。

してやったり顔でニヤリとする貞子。

なんだか、こんな事にもなれつつ妙に冷静な俺。

「あーうん、紹介する、一緒に住んでる貞子だ。貞子、友達のトモヒトだ。」

「は？さだっ……貞子ってあの？え？は？」

混乱は無理もないだろう、まあ常人なら信じてもらえないだろうな……。

「はぁ……え、まさか、なるほど……。あの時やった、あーあー。」

ぶつぶつ言ってるトモヒトをひっぱりながら家に入る俺。

奥に引っ込んでいく貞子。

「あー、でもアレって結構前の話だぞ？なんでお前死んでない？おかしくね？」

そう常人なら信じてくれないだろうが、トモヒトは残念ながら常人じゃなかった。

無意味に良い柔軟な適応力をもっている、まあ、だからこそ俺もこいつなら貞子にあわせてもいいと思ったわけだが。

「なんか、デッキが壊れて、戻れなくなったらしくてな……。そのままいついた感じ。」

「なるほど、超常現象がパターン外の出来事に対応できなくなっ

例外的な状況がおきたわけか・・・。」

さすがトモヒト、小学生の時に夏 怪談 女の子にだきつかれる、
と言う思考だけで1万の怪談を知り何故か若干の霊能力まで手に入
れた男だ。

「粗茶ですが・・・。」

お茶を入れてきた貞子。

「あ、どうもお構いなく。」

受け取る、トモヒト・・・・・・相変わらずこいつの適応力はすげ
え。

「で、貞子さんは、こいつとどこまで行ってるんですか？」

「ブーーーーー!!!」

盛大にお茶を吹いた、こいつ適応力高すぎだろ、

「汚い……。」

布巾でテーブルを拭きながら、仕方がないんだから……。みたいな視線を送ってくる貞子。

「ていうか、トモヒトこいつちょうじょうげんしょ」

「都市伝説」

「都市伝説なんだぜ？どこに行くもなにもねえよ。」

つたく、トモヒトは何勘違いしてやがるんだか。

「……………いや、今のお前らのやり取り見てたらなんの説得力もねえぞ。」

「は？」

トモヒトはなんか、めんどくさそうに語る。

「じゃあお前は、そのどこまで行くもないちょうじょ」「都市伝説」

都市伝説がくれたお茶を受け取って飲んで吹いて拭いてもらってるわけなんだな……。」

それが……なんだっていうんだろうか？

「わかんねえかなあ、お前らしいっちゃお前らしいが……。となると合コン断ったのも彼女のせいか……。まあしょうがねえか、貞子さんこいつ、いろいろと手がかかったり、鈍かったり迷惑かけるとは思いますが見放さないでやってくださいね。」

「は？」

何言ってるんだこいつ。

「任せといて」

貞子も何言ってるんだこいつ。

「ちよっ、お前らしい加減にしろよ。」

「で貞子さん、こいつろのなりそめとか、のろけとか、色々おしえ

てもらえませんか？」

トモヒトが俺をスルーする・・・悪友の顔をしていた・・・。

「いいわ・・・・・・・・あれは10年前のこと」

ちよつとまで10年前にはお前にはあつてないわあああ。

いろいろ突っ込むがスルーされる俺・・・。

とりあえず、お茶を飲み干して落ち着こうと湯のみに手をのばし飲み干す。

「と言つことがあつてね・・・。」

真実と嘘を混ぜながら語る貞子、いやあきらからに嘘の方が多いよ
うな、

とぼとぼとぼ・・・・・・・・何故か、何故かごく自然に空の湯飲みにお茶をつぎたしてくれる貞子をみながら・・・。

「でしょこいつ馬鹿だから。」

笑って貞子と話すトモヒトを見ながら・・・。

こいつを貞子に合わせてよかったなあ……なあんって思っ
たりした。

彼乃名巴友人。（後書き）

どうも、オレサダアップしてみました！。

というかマジスランプ、スランプさんばねえっす。

というかね、俺の周りネット友達も含めて小説読む奴いない事い
い事。

スカイプとかでネタの相談してものってこない事乗ってこない事。

だれか、俺と小説ネタについて語りませんか？

それはさておき、今回は、前からでていた友人ことトモヒト君のお
話です、友人と書いてトモヒトと読む。

ごめんそれだけのキャラです。

ちよつといい話風に仕上げてみました。

主人公の名前はとうしようか……一応ずっと出さないつもり

ではあるんだけど、不便なんですよね。

そのあたりの感想もいただきたいです。

もっともつと感想ください。読んでくれる人がいるのかどうか不
安になります。

まったり更新ですが、みはなさないでね。

滅璃威来襲

「コタツはいいね、コタツはリリンが生み出したなんとかなんとかだよ……。」

「お前さ、見たアニメに影響されるのやめね？」

そんなわけで、俺と貞子は、コタツにはいつて蜜柑を食いながらエアなんぞ見てたりしてた。

「つか、同じ場所にはいんな、対面とか違うところに入れ。お前の足つめたいんだよ。」

「寒いからやだ。」

超常現象の癖に生意気な。

ざーんこーくなー

「携帯なってるわ……貞子、携帯とつて。」

「はい。」

貞子から携帯を受け取り、番号を確認すると、知らない番号。

「もしもし」

とりあえず電話に出てみた。

「ザ．．．ザザー．．．私メリーさん。今駅前にいるの。」

．．．．．。

．．．．．。

．．．．．。

「．．．間に合ってます。」

俺は、それだけ言つと電話を切つた。

「なんだつたの？」

疑問符を浮かべる貞子に

「次かかってきたらお前出る。」

と言つて携帯を差し出す。

「いいの？」

普段携帯とか電話にださせずに居たから、目をリンリンと輝かして電話を受け取る貞子。

ざーんこくーなー

チャクメロが鳴り貞子が嬉そつに、電話に出る。

受話器に耳をあて数秒後。

貞子がこちらをみて、なんとも言えない表情をして……。

「ま……間に合ってます。」

俺と同じ台詞をなんとか吐いて、電話を切った。

「どうすんの……。アパートの前にいるらしいよ……。」

疲れた表情で貞子が俺に聞いてくる。

「こつちが聞きたい。」

ざーんこくーな

無常にも鳴る電話。

「出ろよ、貞子……。」

「やだ。」

嫌らしい……。仕方なく俺が電話に出る。

「私メリーさん今貴方の後ろにいるの。」

不味い！！部屋の前にいるの、がもう一回分あるとおもって油断していた。確か後ろにこられたら……。とそこまで考えた瞬間、貞子が凄いい形相で後ろをふりむき……。

ドンー！

と言う音がした。

俺もあわてて後ろを振り向くと、

金髪の少女が、貞子に頭をシャイニングフィンガーされて壁にめり込んでた。

「貴方は死なないわ、私が守るもの。」

貞子が妙な微笑みを浮かべて言う。

「電話に出る前にその台詞を聞いたかったわ。」

正直かなり焦った。

「私が隣に入ってて良かったでしょ。」

コタツに入りっぱなしで、起きた一連の出来事、妙にひつついてくるこいつを邪険にできなくなってしまった。

「そんなことより、こいつどうする?」

壁にめりこんでる幼女^{スリー}見て言う。

「簀巻きにしてすてましょう。」

「ロープなんかないぞ。ガムテでいいか……。」「

俺はガムテープで、メリー幼女をぐるぐる巻きにして・・・なんか犯罪者な気分だ・・・アパート備え付けのごみ収集所にぶちこんでおいた。例え幼女と言えど、超常現象に優しくする言われは無いのである。

「寒い中外に出させやがって。」

戻ってきたら貞子が壁を補修してた。最近なかなか、細かい事に気づくようになったのである。

まあ、命も助けて貰ったわけだし、撫でてやろう。

撫で撫で。

うれしそうにしてる視線が妙に可愛かった。なので手をとめごまかして、コタツに入る。

って、なんで俺は貞子の隣に入っただ・・・。

「もっと……。」

撫でると言わんばかり（実際言ってる）頭を差し出してくる貞子。

•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

[illegible]

撫で撫で・・・。

撫で撫で・・・。

夜はふけていく。

滅璃威来襲（後書き）

久しぶりに書いてみました。
最近エヴァにはまっていたので、ちよっぴりエヴァ仕様。
感想まっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7282d/>

俺と貞子（オレサダ）

2010年10月9日15時49分発行